

## 資料・研究短報

## 「東南アジア研究地域交流プログラム (SEASREP: Southeast Asian Studies Regional Exchange Program)」について

石井 米雄(神田外語大学)

SEASREP は、東南アジア諸国の人文・社会学者間の相互理解を促進し、域内研究者を結ぶネットワークを構築することによって東南アジア地域研究を発展させることを目的として1995年その趣旨に賛同したトヨタ財団と国際交流基金アジアセンターの支援を得て創設された組織である。このプログラムは当初、インドネシア大学、ガジャマダ大学、マラヤ大学、タマサート大学、フィリピン大学の有志の発議によって開始されたが、のちに上記5大学の学長が覚書に署名することによって制度化されて今日に至っている。1997年度中に、これまでの4カ国5大学に加え、マレーシア国民大学、アテネオデマニラ大学、チュラロンコン大学が参加し、4カ国8大学の連合組織となる方向で準備が進められている。

プログラムの内容は、若手研究者を対象をしばった「人材育成プログラム」(具体的には「語学研修助成 Language Training Grants」、本国以外のシニアな東南アジア研究者を招いて集中講義を行うための「客員教授招聘助成 Visiting Professor ship Grants」、東南アジアの大学院生に研究留学の機会を提供する「東南アジア研究奨励助成 M.A./Ph.D Incentive Grants」と、東南アジア地域を対象とする比較研究のためのセミナーやワークショップの開催を支援する「地域共同事業助成 Regional Collaboration Grants」の2分野に分かれている。プログラムの選考は、現在のところインドネシアの Dr. Taufik Abdullah、マレーシアの Dr. Shaharil Talib、タイの Dr. Charnvit Kasetsiri、フィリピンの Dr. Maria Serena I. Djokno の4名によって構成される選考委員会が担当し、これに域外からアドバイザーとして SOAS 名誉 Reader の Dr. Ruth McVey と石井が参加して助言を行っている。これまで実施されたプログラムの実例を上げれば、マレーシア国民大学のシャムスル教授によるガジャマダ大学での集中講義、タイのチャンウィット博士によるインドネシア史研究、フィリピン大学におけるフィリピン語研修へのインドネシア、マレーシアの研究者の参加プログラムなどがある。

SEASREP は、東南アジアの東南アジア研究者自身が、東南アジアをひとつの地域としてとらえ、これをさまざまな角度から自ら研究しようとするとする意欲的な試みであり、将来これに参加する大学や研究者がさらに増加することによって、東南アジア自身による東南アジア研究が飛躍的に発展することが期待される。

## フィリピン革命とアジア初共和国百周年記念ジャカルタ会議

池端 雪浦(東京外国語大学)

フィリピンでは現在3年間にわたる国家的事業として、フィリピン革命百周年を記念するさまざまな企画が、「フィリピン百周年委員会(Philippine Centennial Committee)」を中心に進められている。第1年度の昨年8月にはマニラで、「1896年フィリピン革命百周年記念国際会議」が盛大に催された。「百周年委員会」とは別個に個々の組織や団体が独自に取り組んでいる企画も多い。

フィリピンでのこうした動きを受けて、去る8月28日から3日間、ジャカルタで標記

の国際会議が開催された。会議を主催したのは、インドネシア科学院(LIPI)東南アジアプログラム、インドネシア歴史学会、教育文化省文化局の三者で、LIPIのDr. Taufik Abdullah氏が委員長とする運営委員会とその下部の組織委員会が会の運営に当たった。

フィリピン革命百周年記念会議をジャカルタで開催するという構想を最初に提起したのは、「東南アジア研究地域交流プログラム協議会SEASREP(Southeast Asian Studies Regional Exchange Program) Council」であった。このところ東南アジアの研究者の間では、域内各地域間の学術・文化交流を深めようという機運が高まっている。なかでも活発な活動をしているのが、SEASREP Councilである。同協議会はSEAS Bulletinを年に2回発行していて、現在第3号まで出版されている。東南アジアの研究者が現在どのような研究活動を行っているかを伝えてくれる、またとない学術情報誌である。今回のジャカルタ会議を指揮したTaufik Abudullah氏は、SEASREP Councilの創設メンバーの一人である。

今年3月に、同氏より送られてきた会議の趣旨説明はなかなか魅力的なもので、フィリピン革命史研究の新たな展開を予感させるものであった。そのこともあって、日本からの参加した九州大学の清水展氏と私は、かなり緊張してジャカルタに赴いた。しかし、実際の会議は私たちの予想とは大いに異なるものだった。第1に会議全体の構成がこの種の学会には不似合いな物々しいものだったことである。インドネシア・フィリピン双方の大物政治家たちが幾人も出席して演説や研究発表を行った。第1日の開会式で最初に挨拶に立ったのはフィリピンの元副大統領サルバドール・ラウレル氏(氏は「百周年委員会」委員長でもある)で、長文の開会の辞を述べたのはインドネシアの官房長官ムルディオノ氏、夜のレセプションは外務大臣アラタス氏の主催といった具合であった。

ペーパーの発表者も国際会議としてはバランスを欠くものだった。全部で21のペーパーのうち、フィリピンからの発表が15、インドネシアからの発表が3、日本からの発表が2、オーストラリアからの発表が1だった。オーストラリアからは、オーストラリア国立大学のDr. Anthony J. Reidが参加した。フィリピンの発表者には、現職の上院議員や元最高裁長官ならびに判事、元国連大使などが含まれていた。

会議終了後、関係者から得た情報によると、この会議の立ち上げに当たったSEASREP Councilの代表が、「フィリピン百周年委員会」と連絡をとって以後、会議の性格が学術的なものからしだいに政治的ないしは祝祭的なものに変化していったらしい。「百周年委員会」にはフィリピンの歴史学者も参加しているが、かれらは委員会の主力と言いがたい状況である。「百周年委員会」から距離をとっている革命史研究者たちもいる。フィリピン大学の歴史学科にその傾向がつよい。昨年のマニラ会議そして今年のジャカルタ会議を振り返ってあらためて感じることは、フィリピン国民国家形成の原点であるフィリピン革命の研究は、さまざまな意味で現代フィリピン政治に連動していることである。

SEASREP Councilが当初、意図したジャカルタ会議の目的は、フィリピン革命をインドネシア独立革命と比較するなかで、フィリピン革命の歴史的体験とその意味をインドネシアにおいても共有することであったが、実際の会議はそれとはずいぶん趣きの異なるものになってしまった。それでもこの会議に提出されたペーパーのなかには、いくつかの注目される成果が見られた。私がとくに関心をもったのは、アメリカの植民地支配に対するフィリピン・ムスリムの対応をジャウイ文書を用いて分析した、フィリピン大学ミンダナオ研究プログラム長、Dr. Samuel K. Tanの研究、マロロス憲法の制定過程で連邦制国家体制が検討された局面を明らかにした元フィリピン大学長／文部大臣、Dr. O. D. Corpuzの研究で

ある。昨年のマニラ会議の一つの特徴は、フィリピン革命の国際環境に関して、ヨーロッパの研究者からこれまでにない新しい視点と事実の発掘がなされたことであった。さまざまな問題をはらんでいるにせよ、一連のフィリピン革命百周年記念事業が、革命史研究を様変わりさせていることはまちがいない。

故千原大五郎先生を偲んで

石澤 良昭(上智大学)

学会会員でありました千原大五郎先生が1997年6月3日にご逝去されました。80歳の天寿を全うされました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

先生のご業績は何といてもインドネシアジャワ島中部にあります世界文化遺産のポロブドール遺跡の保存修復でした。1972年にユネスコとインドネシア政府から推薦を受け、世界で5名選ばれましたポロブドール保存国際技術諮問委員会委員の一人として就任され、13年間にわたり技術助言を行ってこられました。この間に日本とインドネシアを頻りに往復され、先生のこうしたご活動こそは日本の国際文化貢献の先駆をなせるものでありました。先生のこのご実績が広く認められ、1987年に日本建築学会賞を、1988年には大同生命地域研究特別賞を受賞されました。

インドネシアの文化遺産はインドネシア人が責任をもって保存修復・維持管理を行うべきであるという先生の哲学に基づき、ポロブドールで働く技術者・研究者の人材養成を実施されました。この若き技術陣を日本・オランダ・アメリカ・フランスなどへ研修に出し、日本にも多くの技術者が来て各大学研究所で研修を受けました。このとき養成されたスタッフが現在ポロブドールの維持管理を行っており、彼らはインドネシア国内の文化財保存の第一線で活躍しております。これらインドネシアの人々がポロブドール修復活動を通じてポロブドールを世界史の文脈で見直し、自分たちの文化アイデンティティを再確認すると同時に民族のルーツを知ることになり、文化遺産のおかげで民族的な誇りと自負が持てるようになるだろうという、壮大なスケールを持った先生のお考えでした。この点は国際文化交流の視点から高く評価されました。

それから先生は、もちろん日本・インドネシアの相互理解に貢献されました。先生はポロブドール保存修復の窓口となったユネスコ・アジア文化センターの理事に就任され、ポロブドールのパンフレット等の解説紹介文を執筆されました。現在多くの観光客が必ず訪れるポロブドールへの関心と興味を掘り起こしたのは先生が最初でありました。

こうしたポロブドールでのご功績が認められて、日本ユネスコ国内委員会委員を3年間努められ、文化財保存修復の担当委員でもありました。

また、先生はアジアの文化遺産の保存修復のために1982年にイコモス(国際記念物遺跡評議会)の執行委員にアジア諸国を代表して選出され、また1983年から4年間スリランカ文化三角地帯のユネスコ・コンサルタントも務められ、国際文化協力の面でのご活躍は目覚ましいものでありました。同時に上智大学の調査団と共にインド・ミャンマー・タイ・カンボジア・ベトナムの文化遺産の調査に出掛けられ、アジア文化遺産研究と保存修復の第一人者としてユネスコやイコモスの国際会議で発言してこられました。

それから、先生は東南アジア建築学研究の先駆者でありました。1944年から2カ年にわたりバンドン工科大学建築学科の教授を勤められました。そのときポロブドールの創建当時の埋もれた基壇を発見されました。東南アジア建築に関するご高著・論文は80点あまりにおよび、その中でも日本ではじめての『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』は名著の誉れ